

「高速増殖炉『もんじゅ』の廃炉」

2017年01月09日

政府は高速増殖炉「もんじゅ」の廃炉をようやく決定した。遅すぎたのではないか。「もんじゅ」は使用済み核燃料を再処理して、燃料として再使用できる「夢の原子炉」と言われ、資源に乏しい日本では、まさに夢のような話であった。1兆円をつぎ込んで建設された。地元住民たちは事故を恐れ、設置許可の認可を無効とする裁判を起こしたが、最高裁は違法ではないと裁定した。高速増殖炉は技術的に非常に難しく、ナトリウム漏洩火災、機材の落下、点検漏れなどの事故が多発した。17年間に210日しか稼働できなかった。維持費に年間二百数十億円かかるそうで、意味のない金食い増殖炉であった。廃炉費用に三千億円かかるという。国は千兆円の借金を抱えているのに、膨大な無駄な税金を費やした訳である。それでも、誰も責任を取る人はいない。

高速増殖炉の実用化に向けて、経済産業省と文部科学省、電気事業連絡会の幹部による協議会が持たれたが、その議事録が作成されていなかったことが、情報公開請求で分かったと「東京新聞」は報道していた。「もんじゅ」は智慧を司る「文殊菩薩」から取ったネーミングであるが、智慧ある計画でも、運用でもなかった。高速増殖炉は技術的に困難で、フランスを除くヨーロッパ諸国、米国も断念している。政府は今後、「高速増殖炉開発会議」を持ち、進めると言っている。高速増殖炉がないと、現在でも1万9千トンある使用済み核燃料は増え続ける一方である。原爆に転用できるプルトニウムは44トンも保管している。「六ヶ所村」は将来、使用済み核燃料を引き取ってくれるという条件で仮保管所を引き受けた。引き取ってもらえないのなら、各原子力発電所に戻すことになる。そうさせないために、「開発会議」を設置すると苦肉の言い訳をしているのであろうか。あるいは、本気で進めたいのなら、また無駄な税金を消費することになる。フランスは日本からお金を出させ、共同で高速増殖炉の研究を進めたいらしい。

福島第一原発の廃炉は決まっている。今後の諸々の処理費用が11兆円かかると言われていたが、新しい算定では22兆円かかることが分かった。事故処理の技術も確立していないので、これ以上かかることも十分予想される。東京電力だけでは賄えないと、電力料金に上乗せ、国民の税金負担にするとする。電力は生活に欠かせないので、言いたい放題である。その最中、各電力会社は、原発の1日の維持費が数億円かかるからであろう、形振り構わず、再稼働に向け、必死に進めようとしている。

新潟県知事選は大方の予想に反し、再稼働に反対した米山隆一氏が県民の支持を受け、当選した。米山氏と東京電力のトップの会談があった。米山氏は東京電力に三つの検証を求めた。① 福島原発事故の原因究明、② 原発事故による住民の健康への影響、③ 柏崎刈羽原発で事故が起こった際の住民避難計画の実行性。これらの検証が終わるまで、3、4年間、再稼働しないことが確定的になった。事故原因の究明はできるのであろうか。種々の報告書は出されているが、最終的な究明はなされていない。放射能の健康被害の実態をうやむやにせず、明らかにしてほしい。子どもたちの今後の健康に関わることである。

優れた科学知識があると言っても、人間のすることだから事故は起こり得る。原発事故が起きたら、地球規模の災害になる。「原子カムラ」に乗り込んだ人々は、命より経済を優先する世相に飲み込まれ、暴走を止められない。しかし、どこかで断ち切らなければならない。原発は経済問題ではなく、人間理解の思想であり、歴史を展望する哲学の問題である。明日の責任を果たすために、国民は「反原発」の声を上げる時ではないか。